

■近畿地区医学図書館協議会

第1回シンポジウム「21世紀における医学図書館」発表より■

情報デジタル社会における 病院図書室の戦略

首藤佳子

はじめに

昨今、情報環境が大きな変化の時期を迎えている。情報のデジタル化が急速に進み、Internetやパソコン通信の普及に伴ってエンドユーザーアクセスが現実のものとなってきた。一方、医療の環境も変化の時代を迎えて、セルフケアや在宅ケアの推進、インフォームドコンセントの普及などによって患者教育の必要性が高まってきている。医学医療情報の提供、診療録の開示などいわゆる「情報開示」についても論議されるようになってきた。病院図書室でも扱う情報のメディアは多様化し、サービス対象も拡大してきつつある。図書館に求められる機能やサービスが大きく変わろうとしているこのような時代に病院図書室はどのように対応していけばよいか考えてみたい。

1. 環境の変化と病院図書室

病院図書室に即して時代、環境の変化をまとめてみると表1のようになる。

まずもっとも大きな変化は図書室で扱う情報のメディアが多様化したことであろう。従来図書室は印刷体の資料の収集保存を使命としてきたが、情報のデジタル化によって電子情報を扱わなければならなくなった。それも二次情報のみならず一次情報がフルテキストでデータベース化され、すでに一部の雑誌はOnline Edition が Internet上で発行され始めた。病院図書室でもテキストブックや雑

表1 病院図書室を取り巻く環境の変化

| |
|-------------------------|
| 1. 情報メディアの変化 |
| 情報のデジタル化 |
| 全文型データベースの出現 |
| 2. アクセス手段の変化 |
| Internetやパソコン通信の普及 |
| エンドユーザーアクセス |
| 3. MRサービスの自粛による影響 |
| 検索や原報入手 |
| スライド作成 |
| 4. 図書館業務のコンピュータ化 |
| 5. 書誌・情報ユーティリティーサービスの充実 |
| 6. 利用者層の拡大 |
| 医師→看護婦・コメディカル→患者 |

誌をCD-ROM版で購入するなど電子情報を扱う機会が増えてきており、病院図書室のようにスペースに余裕のない図書館ではこの傾向はさらに進むと予想される。

Internetやパソコン通信の普及も図書室にとっては見逃せない。エンドユーザーアクセスが進むなかで図書室の役割そのものが問われてくるようになるからである。また、毎年医師をはじめとして多くの若い医療スタッフが入職してくる病院ではデジタル回線を使って情報にアクセスしたいという要求が早晩利用者から出されると予想され、図書室がその対応を迫られる場合もあると考えられる。多くの病院ではこれらの臨床に必要な情報

すとう よしこ：星ヶ丘厚生年金病院

や文献は製薬会社のサービスに依存しきっていた。80年代にはその傾向が顕著であった。ところが、1993年にこのサービスが自粛されるようになり必要な情報は病院や個々の利用者が自前で調達しなければならなくなった。つまり、病院は情報へのアクセス手段や、さらには情報の加工（プレゼンテーション資料作成など）手段を備えておかなければならなくなったのである。病院図書室ではこの数年業務のコンピュータ化が徐々に進められてきたが、これを機にさらに機械化が図られるようになった。

コンピュータや通信技術の進歩は図書館業務にも大きな変化をもたらしている。大規模な情報・書誌ユーティリティサービスが充実し、これを利用することによって分類や目録作成など従来図書館業務の要であった整理業務を省力化できるようになった。図書館員の仕事の質も変わっていくのであろうか。

病院図書室はもともと医師のために開設されたのであるが、最近では多くの病院で看護婦やコメディカルなど病院職員すべてに開放されるようになった。さらに患者さんが図書室を訪れることが以前に比べると多くなり、また間接的にはあるが患者さんに対するインフォームド Consent 用の資料などの情報提供が見られるようになった。

2. 平均的な病院図書室

ここで、平均的な病院図書室の歩みと現状を見ておきたい。星ヶ丘厚生年金病院図書室をサンプルに表2に示した。

表2ではこの20年間の蔵書、検索ツール、相互貸借による文献入手の推移をあげたが、この他にももちろん書庫の整備と拡大、読書スペースの確保などを行ってきた。蔵書は当初に比べると約10倍になり、購読雑誌数は約4倍になった。やはり蔵書規模の拡大とスペースの確保という従来のあるべき図書館像を目指して努力してきたと言える。文献検索については1970年代後半よりJOISサービスを院外に依頼し80年代半ばにはJOIS、Dialogのオ

ンライン検索を導入した。院外への文献依頼は当初は病院に蔵書の蓄積がなく必要な文献の大半は院外へ依頼していた。70年代にはそのほとんどを大学図書館に依頼していたが、80年代には病院図書室の割合が増え、90年代に入ってから各種情報機関への依頼が約半数を占めるようになった。このように当院では院内で必要とされる情報について主として蔵書規模の拡大を主にしながら、それを補足する意味で院外への情報入手ルートを開拓してきたわけであるが、これらの努力には自ずと限界があり、情報量の増加に伴って相対的に自館の所蔵資料の利用価値は低くならざるを得ない面があった。

3. 病院図書室にとって環境変化が意味するもの

それでは、こうした病院図書室にとって最近の環境の変化はどういう意味を持つのか簡単に整理しておく。端的に言うと、私はこれらの変化は病院図書室にとって概ね好ましい歓迎すべき変化だと考える。なぜなら、これらの変化は伝統的な図書館の機能そのものの変化を含んでおり、また院内における病院図書室の存在意義を一新する契機ともなる内容を伴っていると考えるからである。一つには図書館の規模を機能と切り離して考えることができるようになること一すなわちどこからでも簡単に情報にアクセスできる可能性ができたことであろう。そして、そのことは小規模な図書室でも挑戦できる、情報アクセスの戦略を立てることができるということでもある。もう一つは利用者層が拡大することによって院内の「情報」に関する関心を喚起することができるということである。患者さんへの医学医療情報サービスまで含めて考えるなら、従来病院図書室像を変革する大きな契機となるだろう。さらに、病院図書室においては「図書館」としての形態がそれほど完全ではないため方向転換がしやすいという利点もある。

「患者さんへの医学医療情報サービス」に

表2 星ヶ丘厚生年金病院図書室のあゆみ

| | | | |
|--------|--|---|---|
| 1970年代 | 蔵書 1500冊 購読誌 54誌 (1973年図書室設置時) ↓ 徐々に増加 | 医学中央雑誌 (1973年～) Index Medicus (1973年～) Monthly, Cumulated 日本看護関係文献集 (1973年～) | 年間約1800～2000件 100%大学医学図書館に依頼 |
| 1980年代 | 1980年代半ばには 購読誌は215誌 | 1986年オンライン検索導入 年間300～400件 | 年間約800～1000件 徐々に病院図書室への依頼増加 1980年代半ばには対病院図書室40% 対大学図書館60% |
| 1990年代 | 蔵書 14000冊 購読誌 230誌 (1994年) | 最新看護索引 (1987年～) 1993年CD-ROM検索導入 (医中、Medline) 年間1000～1200件 | 年間約300～1000件 徐々に対図書館から対情報機関へ 1994年には対病院図書室24% 対大学図書館24% その他 41% |

ついて若干補足すると、昨年5月にWashington, D. C. で開催されたMLA' 95/7thICMLの参加印象記のなかでスナイダー A 純子さんはアメリカの病院図書室の動向はPatient Education and Informationであると書いておられる。日本でも京都南病院の山室真知子さんが昨年9月毎日新聞紙上で患者さんへの医学医療情報の提供について提言を發表された。日本においてはまだ一般的ではないが、時代の動向としては確実にそういう方向に進んでいると考えてよい。

エンドユーザーアクセスが一般的になると図書館はいらなくなるのではないかという議論も一方ではあるが、現在はまだ過渡的な段階で図書館の存立自体に言及するのは控えたい。

4. 新しい病院図書室のデザイン

では、環境の変化に対応できる病院図書室を創るにはどうしたらよいか。まず、時代の動向を踏まえ、デジタル情報社会の恩恵を享受できる体制を整備することが大切である。そして、従来の図書館のパラダイムを組み立て直し、小さくても完成した形をどうイメージしデザインするかが問われる。図書館機能を分析し強化すべき点を明らかにすること、その上で目標に向けてどう具体化し実現していくかが考えられなければならない。表3に私の考える図書室の概略を挙げてみる。

機能としては一次・二次情報の入手拠点としての役割を改めて明確にすること、多様な情報の整理と統合、さらには情報発信基地としての機能を併せ持つことが望ましいと考える。患者さんへの医学医療情報のサービスももちろんその視野のなかに入れておくべき事柄である。これらの機能を院内で明確にさせた上でマンパワーの充実を図ること。各図書室が果たすべき役割に見合った人員の確保、その教育育成が何よりも緊急の課題であろう。人員確保が十分でない場合には思い切った図書館業務の合理化が図られるべきで、各種情報ユーティリティの活用や外注、委託も考

表3 図書室の基本的な枠組み

| | |
|----------------|--|
| 【機能】 | 一次・二次情報の入手拠点 多種多様な情報の整理と統合 情報の発信基地 |
| 【蔵書】 | Core Collection バックナンバーの軽量化 ニューメディアの導入 |
| 【施設・設備】 | コンピュータとその周辺機器の整備 ソフトの充実 各種通信機器類の整備 |
| 【マンパワー】 | 複数人員の確保 情報テクノロジー教育 |
| 【業務】 | 従来の図書館業務の合理化 インストラクター |
| 【環境】 | 図書館利用システムの再整備 情報ネットワークへの参加 |

えるべきであろう。

蔵書、コレクションに関しては従来図書館がもっとも力を注いだ部分であるが、これから先は、特に病院図書室においてはコアコレクションに限定してもよいのではないだろうか。また、バックナンバーの軽量化を図り全体にこの部分をスリムにすること、これは他の部分を強化するためにはスペースの面からも財政的な面からも必要なことである。

施設や設備面では思い切った変革への意志が必要である。先を見通した整備計画が立案されるべきで、またその実現に向けての地道な努力が必要になる。コンピュータとその周辺機器類、ソフト類の充実と整備が基本である。そのためには図書室のレイアウトの大幅な変更や配線工事などが必要になってくるかも知れない。また、作業スペースが必要とな

る反面読書スペースや書庫部分の削減が必要となるかもしれないため院内での合意をとりつけることも大切であろう。これに伴って従来の図書室利用システムの改変やそのPRも必須の事柄になってくると思われる。

一方、外部情報ネットワークへの参加は従来にも増して重要となってくる。各種情報ネットワークへのアクセスとともに病院図書室では原報入手のためのネットワーク活用もより一層心がけるべきであろう。これらの図書室変革を推進するに当たって従来の「図書館」という呼称がふさわしくない場合には機能に見合った新たな呼称を考えるのも一案である。

5. 今後の課題

現在、医療経済が逼迫するなかほとんどの病院が経営に苦しんでいる。そういう状況の下で図書室の改革を図るとするのは多くの困難が伴うことではある。しかし、決して等閑視できる状況ではないことも確かです。まず担当者や図書室の周辺にいる人たちの意識変革と改革への熱意が何よりも大切である。これからは何よりも情報部門の強化が必要なのだという院内コンセンサスを得ること、さらに図書室において臨床の場に即した情報提供サービスがどれだけ実践として積み上げられるかが問われる。その上で病院図書館員の雇用やその教育について新たな取り組みが早急にな

されるべきだと考える。

これらの課題は一つの病院図書室の課題であると同時にすべての病院図書室の課題でもある。改革への条件の整ったいくつかの病院でそのモデルを意識的に創ってみること、改革のノウハウを知らせ合うこと、実際の図書館活動、情報提供サービスについてお互いに実践報告をし合うことなどが必要である。

アメリカの医学・病院図書室の動向であるInternetとPatient Education and Informationは日本でも早晚共通する課題となろう。新しい時代に即した図書室を創るためにより一層図書館館の連携を密にし、情報交換を図ることが必要になると考える。

参考文献

1. スナイダー A. 純子：MLA' 95に参加して
ほすびたるらいぶらりあん, 20(3):93-96,
1995.
2. 山室真知子：患者と医療者のコミュニケーション—選択提供か自由閲覧か—病院
図書室開放に課題 毎日新聞, 1995年9
月16日 朝刊.

*本稿は1995年12月8日大阪大学生命科学図書館で開催された「近畿地区医学図書館協議会第1回シンポジウム」の発表に若干の加筆訂正を加えたものである。